

江戸のエナジー 風俗画と浮世絵

展示目録

2020年12月19日(土)～2021年2月7日(日)

【前期：2020年12月19日(土)～2021年1月17日(日)、後期：1月19日(火)～2月7日(日)】

休館日：毎週月曜日、年末年始12月28日～1月4日は休館、ただし1月11日は開館、12日は休館

◎重要文化財 ○重要美術品 展示期間：前期=◇ 後期=◆

No. 指定作者名	作品名	材質等	員数/版元	制作年代	展示期間
序章					
1	英一蝶 朝暎曳馬図	紙本墨画淡彩	一幅	元禄元-11年(1688-98)頃	
2	○ 円山応挙 江口君図	絹本着色	一幅	寛政6年(1794)	
第一章 近世初期風俗画にみるエナジー					
3	菱川師宣 十二月風俗図巻	絹本着色	二巻	元禄期(1688-1704)前期頃	巻替
4	◎ 四条河原遊楽図屏風	紙本金地着色	二曲一双	寛永期(1624-44)頃	
5	歌舞伎図屏風	紙本金地着色	二曲一隻	江戸時代前期 17世紀	
6	上野隅田川図屏風	紙本着色	六曲一双	元禄-享保期(1688-1736)頃	
第二章 錦絵の誕生と展開					
7	二世鳥居清倍 山下金作の難波津、市川団十郎の佐野源左衛門、松本幸四郎の青砥左衛門	細判漆絵	伊賀屋勘右衛門	享保8年(1723)	◇
8	二世鳥居清倍 初代萩野伊三郎の石部金吉、早川新勝	細判漆絵	鱗形屋孫兵衛	享保12年(1727)頃	◆
9	二世鳥居清倍 富沢門太郎、市川羽左衛門	細判漆絵	村田屋治郎兵衛	享保期(1716-36)後期頃	◇
10	二世鳥居清倍 二世市川団十郎の矢の根五郎	細判漆絵	伊賀屋勘右衛門	享保後期(1716-36)頃	◆
11	西村重長 那須与一と官女玉虫	細判漆絵 二枚	鱗形屋孫兵衛	享保期(1716-36)頃	◇
12	西村重長 風流通小町	細判漆絵	伊賀屋勘右衛門	享保期(1716-36)頃	◆
13	二世鳥居清信 中村久米太郎、中村七三郎	細判紅摺絵	鱗形屋孫兵衛	宝暦期(1751-64)頃	◇
14	二世鳥居清信 三世沢村小伝次の奴与勘平	細判紅摺絵	江見屋吉右衛門	宝暦期(1751-64)後期頃	◆
15	奥村政信 芝居狂言浮絵根元	大大判墨摺筆彩	奥村源六	宝暦6年(1756)	◇
16	奥村政信 風雅火鉢無間鐘浮絵根元	大大判墨摺筆彩	奥村源六	延享期(1744-48)	◆
17	鈴木春信 七福神図	大判紅摺絵	岩戸屋源八	宝暦期(1751-64)末頃	◇
18	鈴木春信 ことろことろ(絵暦)	大判摺物	村松喜英 梓	明和2年(1765)	◆
19	鈴木春信 花王(さくら)	中判錦絵		明和4-6年(1767-69)	◇
20	鈴木春信 定家、寂蓮、西行	細判錦絵	丸屋甚八	明和4-6年(1767-69)	◆
21	北尾重政 子ども遊び わいわい天王	中判錦絵		安永期(1772-81)頃	◇
22	北尾重政 子ども遊び からくり	中判錦絵		安永期(1772-81)頃	◆
23	磯田湖龍斎 青楼十二単 かな屋江口竹の 竹じ	大判錦絵		安永期(1772-81)頃	◇
24	磯田湖龍斎 雛形若菜初模様 松かねや内 風折	大判錦絵		安永期(1772-81)頃	◆
25	鳥居清長 三世沢村宗十郎の小松重盛、中山小十郎の八丁礮喜平次、三世大谷広次の三浦荒次郎、三世市川八百蔵の悪源太義平	大判錦絵	高津屋伊助	天明5年(1785)	◇
26	鳥居清長 出語り図 三柙徳次郎の夕霧、四世松本幸四郎の藤屋伊左衛門	大判錦絵	西村屋与八	天明4年(1784)	◆
27	勝川春山 羽州村山郡長瀬村 大童山文五郎	大判錦絵	江崎屋吉兵衛	寛政6年(1794)頃	◇
28	勝川春山 子ども三人遊び 相撲	大判錦絵	西村屋与八	寛政-享和期(1789-1804)頃	◆

No. 指定	作者名	作品名	材質 等	員数/版元	制作年代	展示期間
29	勝川春泉	四世松本幸四郎、三世大谷広次	細判錦絵二枚続		天明寛政期(1781-1801)頃	◇
30	勝川春英	仮名手本忠臣蔵 九段目	大判錦絵	伊勢孫	文化4年(1807)	◆
31	勝川春好	五世市川団十郎の暫	大判錦絵		天明期(1781-89)末-寛政期(1789-1801)初頃	◇
32	勝川春好	四世岩井半四郎の白拍子、 実はおしづ亡魂、 五世市川団十郎のせいたか坊、 三世大谷広次のこんがら坊	間判錦絵		寛政2年(1790)	◆
33	喜多川歌麿	見立邯鄲の夢	大判錦絵	近江屋権九郎	寛政期(1789-1801)頃	◇
34	喜多川歌麿	四美人やつし車引	小奉書全紙判錦絵		寛政5年(1793)頃	◆
35	喜多川歌麿	絵兄弟 見立猿回し	大判錦絵	近江屋権九郎	寛政期(1789-1801)頃	◇
36	喜多川歌麿	絵兄弟 金太郎と山姥	大判錦絵	近江屋権九郎	寛政期(1789-1801)頃	◆
37	喜多川歌麿	点勝美人花生合 藤棚下の髪洗い	大判錦絵	和泉屋市兵衛	文化期(1804-18)	◇
38	喜多川歌麿	二葉草七小町 かよひ小町	大判錦絵	鶴屋喜右衛門	享和-文化期(1801-18)	◆
39	歌川国政	尾上栄三郎の曾我五郎	間判錦絵	上村与平	享和3年(1803)	◇
40	歌川国政	市川男女蔵の順礼大助 実は孔雀三郎	間判錦絵	山口屋忠助	寛政8年(1796)	◆
41	歌川豊国	沢村源之助の十郎祐成と 尾上栄三郎の五郎時宗	大判錦絵		文化期(1804-18)	◇
42	歌川豊国	松葉屋内 粧 やよひ にほひ	大判錦絵	蔦屋重三郎	寛政期(1789-1801)頃	◆
43	栄松斎長喜	井筒中居かん 芸子のふきや めせや	大判錦絵	蔦屋重三郎	寛政期(1789-1801)中期	◆
44	葛飾北斎	忠臣蔵討ち入り	大判錦絵三枚続	西村屋与八	天明期(1781-89)頃	◇
45	葛飾北斎	吉原妓楼の囃	大判錦絵五枚続	伊勢屋利兵衛	文化8年(1811)	◆
46	歌川国貞	両国夕涼みの囃	大判錦絵三枚続	佐野屋喜右衛門	天保13年(1842)	◆
47	歌川国芳	両国納涼花火	大判錦絵三枚続	辻岡屋文助	嘉永2年(1849)	◇
48	魚屋北溪	春の山又	大短冊判摺物 二枚続		天保元年(1830)頃	◇
49	歌川国貞	七世市川団十郎の菅丞相、 五世瀬川菊之丞の梅王丸	大短冊判摺物		天保2年(1831)	◇
50	歌川広重	阿波鳴門之風景	大判錦絵三枚続	岡沢屋太平治	安政4年(1857)	◇
51	歌川広重	武陽金沢八勝夜景	大判錦絵三枚続	岡沢屋太平治	安政4年(1857)	◆
第三章 東西美人競べ						
52	菱川師宣落款	美人若衆図	絹本着色	一幅	元禄期(1688-1704)頃	
53	菱川師房 蟬房賛	遊女と禿図	絹本着色	一幅	元禄期(1688-1704)頃	
54	古山師重	石山寺図	絹本着色	一幅	貞享期-元禄10年(1684-97)頃	
55	古山師継	草子洗小町図	絹本着色	一幅	宝永-享保期(1704-36)頃	
56	西川祐信	女通玄図(見立張果老図)	絹本着色	一幅	享保-元文期(1716-41)頃	
57	宮川長春	形見の駒図	絹本着色	一幅	正徳-享保期(1711-36)頃	
58	奥村政信	梅花美人図	紙本着色	一幅	宝暦期(1751-64)頃	
59	礪田湖龍斎	雪中遊行図	絹本着色	一幅	天明2-8年(1782-88)頃	
60	勝川春章	梅花二美人図	絹本着色	一幅	寛政元-4年(1789-92)頃	
61	勝川春童	遊女と禿図	絹本着色	一幅	寛政期(1789-1801)頃	
62	歌川豊広	見立蝦蟇鉄拐図	絹本着色	双幅	寛政-享和期(1789-1804)頃	

No. 指定 作者名	作品名	材質 等	員数/版元	制作年代	展示期間
63	渡辺南岳 亀田鵬齋題詩	玄宗貴妃一笛双弄図	絹本着色	一幅	文化9年(1812)題
64	葛飾北斎	桜下遊女と禿図	絹本着色	一幅	文化4-7年(1807-10)頃
65	菱川宗理 柳亭種彦題詩	美人愛狗図	絹本着色	一幅	享和期(1801-04)頃
66	蹄齋北馬 大田南畝賛	三美人図	絹本着色	三幅対	享和期(1801-04)頃
67	柳々居辰斎 鹿都部真顔賛	秋夜美人図	絹本着色	一幅	享和期(1801-04)頃
68	歌川国芳	雪見舟図	絹本着色	一幅	嘉永期(1848-54)頃
69	鈴木其一	雪月花三美人図	絹本着色	三幅対	文政期(1818-30)
参考		『浮世絵派画集』特別上装限定百部のうち第41号	五冊 審美書院	明治39-41年(1906-08)	
参考		五彩桜花酒宴図盤	景德鎮窯	一枚	清時代 (17世紀後半-18世紀初期)

主要絵師解説

はなぶさいちちよう
英 一 蝶
(1652-1724)

京都の医師・多賀伯庵の子。江戸へ下り狩野安信に画を学び、菱川師宣らに刺激をうけ軽妙洒脱な風俗画を確立した。三宅島に流罪となり、11年後、恩赦により江戸へ戻り、多賀朝湖から英一蝶と改名。俳諧もよくした。

まるやま おうきよ
円山 応 挙
(1733-95)

円山派の祖。丹波の人。通称、主水。初め石田幽汀に狩野派を学ぶ。のち西洋画の透視図法や来舶清人・沈南蘋の写実技法を研究、写実性と日本の伝統的な装飾画様式を融合した新様式を確立し京都画壇を制覇した。

ひしかわもろのぶ
菱川 師 宣
(?-1694)

安房の人。浮世絵の始祖。江戸に出て版本の挿絵・絵本を多く描き、独自の美人様式を確立。歌舞伎や吉原の風俗などを肉筆画として制作、代表作に「見返り美人図」など。なお菱川師房(生没年未詳)は師宣の長男。

ふるやまもろしげ
古山 師 重
(作画期:1684頃-97頃)

師宣の門人。はじめ菱川の画姓を称し、後に本姓の古山を名乗る。絵本や好色本、枕絵組物、肉筆美人画などを手がけ、画風は師宣晩年に似るとされる。古山師継は門人と推測され、宝永-享保(1704-36)頃、肉筆の美人風俗画を描く。

にしかわすけのぶ
西川 祐 信
(1671-1750)

上方浮世絵の前半期を代表する絵師。西園寺致季の御家人で右京と称し、画は狩野永納、土佐光祐に学んだと伝える。挿絵画家として活躍し、60種を超える絵本を刊行、一枚絵(浮世絵版画)はないが、鈴木春信ら江戸の浮世絵師にも多大な影響を与えた。

みやかわちようしゅん
宮川 長 春
(1682-1752)

元禄年間(1688-1704)後半までに江戸に出た肉筆美人風俗画を専門とした浮世絵師。土佐派を学び、師宣を慕い、狩野派や懷月堂なども学習した。享保年間(1716-1736)以降、本格的に活動し、画卷や屏風には江戸名所風俗図や路上図も多い。

おくむらまさのぶ
奥村 政 信
(1686-1764)

元禄期(1688-1704)から錦絵誕生直前まで約60年活躍。芳月堂、丹鳥齋、文角などと号す。江戸通塩町で版元奥村屋の経営に参画、一枚摺では幅広柱絵や透視図法を駆使した浮絵、三幅対風の組み物など新形式の開拓に努めた。肉筆画、版本のほか、初期の丹絵時代の美人画はとくに優れる。

二世鳥居清信
(1702?-52)

初世の三男、または甥。主に漆絵、紅摺絵及び肉筆浮世絵を描いた。なお、初世(1664-1729)は鳥居派の祖。瓢箪足や蚯蚓描きとよばれる躍動的な描法を創始して豪快な役者絵を確立。美人画にもすぐれた。

二世鳥居清倍
(1706-63)

初世鳥居清信の門人で享保9年(1724)に清信の娘婿となり、以後清倍を名乗るという。役者絵では丹絵、紅絵、漆絵、紅摺絵を手掛けた。また浮絵「近江八景」シリーズが知られる。

西村 重 長
(?-1756)

江戸の人。紅絵期から紅摺絵期を代表する絵師のひとり。版画と草双紙の挿絵や、浮絵も手掛けるが、美人風俗画が最も多い。

鈴木 春 信
(1725?-1770)

初め鳥居派風の美人画や役者絵を描いたが、明和2年(1765)俳諧師の大小の会(絵暦の交換会)に画家として参加、彫師や摺師の協力を得て多色摺木版画(錦絵)を実現した。美人画を得意とし、遊里風俗や日常の情景に古典和歌の歌意などを通わせた見立絵を好んで制作。

いそだこりゅうさい 儀田湖龍齋 (1735-1788頃)	鈴木春信と親交し、一時春広と号した。春信没後「雛形若菜初模様」のシリーズを版行。晩年は肉筆画に専念し、天明2年、浮世絵師として異例の法橋位に叙された。
とりいきよなが 鳥居清長 (1752-1815)	江戸の本屋白子屋市兵衛の子。鳥居清満の養子となって鳥居派四世を継承。初め鳥居派風の役者絵を描き、出語り図などを得意とする。大判の続き絵を考案し長身で健康的な美人を群像形式で描いた。
きたがわうたまる 喜多川歌麿 (1753?-1806)	天明4年ころ版元・蔦屋重三郎(1750-1797)に見いだされ、寛政2年、 <small>おおくびえ</small> 大首絵を発表、女性の官能的な美を描いた。また、狂歌絵本・肉筆画も制作。幕府の忌諱に触れて罪となり、没した。
かつかわしゅんしょう 勝川春章 (1726-92)	宮川長春の弟子・春水に学び、錦絵創始期に画壇に登場し、特に役者似顔絵で天明(1781-89)中期頃まで人気を博すが、天明前期ごろから肉筆美人画を多数描き、第一人者となった。 <small>かつかわしゅんどう</small> 勝川春童(生没年未詳)はその弟子で、安永から寛政期(1772-1801)、黄表紙の挿絵を数多く手掛け、役者絵や武者絵、絵暦も残す。
うたがわとよひろ 歌川豊広 (?-1830)	歌川豊春の門下で、初代歌川豊国とならび称された。美人画を得意とし、合巻や読本などの挿絵も多い。弟子に初代歌川広重がいる。
わたなべなんかく 渡辺南岳 (1767-1813)	南岳は、円山応挙(1733-95)に画技を学び、応挙十哲のひとりに数えられる絵師。美人画や花鳥画を得意とした。晩年に江戸へ遊学し、谷文晁・酒井抱一とも交わった。門人には <small>なんれい</small> 鈴木南嶺(1775-1844)や <small>ちんわん</small> 大西椿年(1792-1851)、 <small>らいしやう</small> 中島来章(1796-1871)らがいる。
かつしかほくさい 葛飾北斎 (1760-1849)	勝川春章に入門して春朗と号した。版画、版本、摺物とジャンルも多岐にわたりまた様々な画題を手掛けた。肉筆画も多く、寛政6年から10年まで宗理と号し、 <small>ふじびたい</small> 面長の富士額 <small>の</small> の美人画を描いてもある。
ひしかわそうり 菱川宗理 (生没年不詳)	葛飾北斎の門人で、寛政10年に三世俵屋宗理を継ぎ、後に菱川と称した。作画期は寛政-文化前期(1789-1810)頃。
ていさいほくば 蹄齋北馬 (1770?-1844?)	北斎門人の筆頭格で、狂歌摺物や読本、肉筆画を得意とした。本名「光隆」。
りゅうりゅうきしんさい 柳々居辰斎 (生没年不詳)	北斎門人で見事な狂歌摺物を多数残したことで知られる。作画期は享和-文化期(1801-18)頃。
うたがわくによし 歌川国芳 (1797-1861)	江戸日本橋の京紺屋の家に生まれ、 <small>とよくに</small> 歌川豊国に認められ、12歳で入門、23歳頃から「一勇齋」の号を使用し、文政10年(1827)から出版された「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」が出世作。 <small>むしやえ</small> 武者絵を得意とした。門人に <small>よしいく</small> 歌川芳幾、 <small>よしとし</small> 月岡芳年、 <small>わかく</small> 河鍋晩斎らがいる。
歌川広重 (1797-1858)	江戸の人。本姓、安藤。歌川豊広に師事。叙情性と親しみやすさに富んだ風景画にすぐれ、代表作の「東海道五十三次」をはじめ、諸国風景や江戸名所を多数描いた。
歌川豊国 (1769-1825)	歌川派の創始者歌川豊春の門人。歌川派隆盛の端緒を開く。美人画は清長、歌麿の影響を、また役者絵では勝川春英の作風を採り入れた画風を展開。門人の歌川豊重、歌川国貞が一陽齋豊国を襲名、四世まで続いた。
歌川国貞 (1786-1865)	初世歌川豊国の門人。号は一雄齋、五渡亭など。のち一陽齋豊国を襲名、二世を自称したが、実は三世である。役者絵、美人画とも浮世絵師中、最も多作であったといわれる。
すずききいつ 鈴木其一 (1795頃-1858)	姫路藩主酒井家家臣が編纂した書物に武家の出身とあるが、近江出身の染物職人の子とする説もある。18歳の頃に、 <small>のぼり</small> 姫路藩主の子で江戸琳派の酒井抱一に入門、付人となり、その作画を助けた。町絵師が描くような幟や凧など画域が広く多彩な絵師。

〈関連イベント〉

- ① クリスマスコンサート(100万人のクラシックライブ)
12/20(日) 13:30開場、14:00~15:00
- ② 河野元昭館長のおしゃべりトーク
「美人画もあり！ 静嘉堂—饒舌館長ベストテン—」を口演す
1/11(月・祝) 11:00~12:30
- ③ 学芸員によるスライドトーク「静嘉堂の肉筆浮世絵コレクション」
1/24(日) 11:00~12:30
- ④ 列品解説(スライド解説を予定)
12/19(土)、1/9(土)、1/14(木)、1/28(木) 各14:00~

*①・②は開館時より整理券配布、全て地階講堂にて、参加無料、定員50名

〈次回展覧会のお知らせ〉

岩崎家のお雛さま

2021年2月20日(土)~3月28日(日)

公益財団法人
静嘉堂

静嘉堂文庫美術館

〒157-0076 東京都世田谷区岡本2-23-1
TEL.050-5541-8600(ハローダイヤル)

<http://www.seikado.or.jp>